

医療DXで加速する働き方改革： サステナブルヘルスケアへの新時代

熊本大学病院 医療技術部 診療放射線技術部門 池田龍二

序文

医療DXの本質は、単に業務の効率化やデジタル技術の導入にとどまらず、医療現場が抱える多様な課題を包括的に解決するための新たな枠組みを創り出すことにある。特に、医師の働き方改革を推進する上では、タスク・シフト/シェアによる負担分散だけでなく、その基盤となるシステムやデータの標準化、さらには患者やスタッフ双方が納得して利用できる仕組み作りが不可欠である。ここで欠かせないのが、DXのインフラを支えるベンダーの存在だ。新技術の導入にはスペシャリストとの協働が必須であり、最適なハード・ソフト両面の選択が鍵を握る。

一方、持続可能な医療体制を築くには、サステナビリティやSDGsへの視点も必要である。医療資源の不足、地域間格差、さらには環境負荷の抑制など、現代の医療は複雑で広範な問題に直面している。デジタル技術を活用することで、データの二次利用やリソース配分の高度化が進み、現場の課題をより効果的に可視化できる。しかし、システムコストやセキュリティリスクへの懸念も大きく、拙速なDXは現場の混乱を招く可能性がある。そこで、医療DXをより包括的に捉え、医療WX（Work Transformation）として、人の働き方や組織全体の変革を視野に入れた取り組みが重要となる。

賛否両論あるが、先進技術による自動化と人の手によるサポートが適切に組み合わせられることが、最終的には患者の満足度向上と医療従事者の負担軽減を両立する道筋となる。持続可能性を軸に多角的な視点を取り入れ、ベンダーと現場が互いに連携しながら、新たな医療の形を模索していくことこそが、これからの医療DX／WXに求められる方向性といえる。